

令和 5 年 6 月 26 日現在

機関番号：11201

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00053

研究課題名(和文) 楚簡を用いた戦国期から秦漢期の『詩』テキスト変容に関する思想史的研究

研究課題名(英文) Research on the Change of Text in the Book of Poetry on Chu Bamboo Slips from the Zhanguo Period to the Qin/Han Period

研究代表者

藪 敏裕 (Yabu, Toshihiro)

岩手大学・教育学部・教授

研究者番号：20220212

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：現行本『毛詩』と近年出土した『郭店楚墓竹簡』『上海博物館蔵戦国楚竹書』等とに共通に見えるいくつかの語句についてその差異を考察した。その結果、毛詩系統の詩説の伝承は、楚簡では確認できないこと、金文や伝世文献とも整合的ではない箇所があることを部分的に明らかにした。漢代の『詩』が当時の人々にどのように認識されていたのか、『詩』はその成立以降いかなる展開をへて、『詩経』として定立するのかという問題を考察するには、近年陸続として出土する戦国期から漢代にかけての同時代資料である楚簡等を視野にいれつつ、戦国期から漢代の伝世文献の詩の引用の検討を行う必要があることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、『毛詩』のテキスト及び『毛傳』等の解釈が先秦から存在したということを無前提に容認し、これらの『詩』理解に基づいて楚簡・漢簡を読解する従来の方法を打破し、1)戦国期の「楚簡」等に見える楚系文字の『詩』理解、2)前漢代の『馬王堆帛書』や『阜陽漢簡』等に見える「漢簡今文」期の『詩』理解、3)古文系『毛詩』(『毛傳』『毛序』を含む)による『詩』理解、という三つの層を想定することにより『毛傳』等が先秦からあったという先入観が誤りであることを部分的に明らかにし、戦国期から漢代の『詩』の実態の一端を当時の事実に基づいて究明しようとする点が従来の研究と異なる学術的独自性である。

研究成果の概要(英文)：This study analyzed the differences in common terms appearing in the Classic Anthology Mao-shi and the recently excavated texts such as the Guodian Chu Tomb Bamboo Slips and the Shanghai Museum Sengoku Period Bamboo Scroll. As a result, it was partially revealed that the transmission of the poetic theories of the Mao poetry lineage cannot be confirmed in the Chu Bamboo Slips, and there are inconsistencies with the Chinese bronze inscriptions and current versions of the inscriptions. In order to examine how the poetry of the Han Dynasty was perceived by people at that time, and to understand the development and establishment of the 'Shijing (詩経)' since its creation, it is necessary to continue studying quotations from modern versions of the poems appearing in the Chu Bamboo Slips and other unearthed materials originating from the Zhanguo Period to the Han Dynasty.

研究分野：中国思想史

キーワード：『詩経』『毛傳』『毛序』『郭店楚墓竹簡』『上海博物館蔵戦国楚竹書』

1. 研究開始当初の背景

近年湖北・湖南地域で出土する楚簡は、楚国における戦国期の同時代資料ではあり、当時の儒教文献の解釈の流布状況を検討するにあたっても格好の資料である。楚簡の隸定・解釈は、近年文字学的研究の進展とともにかなり進んでいる。しかし、楚簡に引用される古典、特に詩については『毛傳』等の訓詁が戦国以前から存在していたことを暗黙のうちに前提としており、戦国期の実態に即して詩を解釈しているとは言いがたい。たとえば、『上海博物館蔵戦国楚竹書一』が引用する大雅・文王篇の「穆穆文王、於緝熙敬止」についても、文王篇の『毛傳』の訓詁「緝熙、光明」をそのまま採用して解釈している。しかし、この「緝熙」について申請者は当時から検討が必要であると考えていた。『毛傳』『毛序』等の古文系の訓詁の再検討は、先秦の『詩』の実態究明のためには必須であり、これにより戦国期の実際に即した『詩』理解に基づく楚簡の読解が進展すれば、戦国期から漢代にかけての『詩』理解の有り様の実態解明に寄与するとともに、儒教成立の実像を思想的に明らかにすることができるとの問題意識を抱いていた。

2. 研究の目的

後漢の隸書で書かれた熹平石經の『詩經』は、断片的ではあるが今文系の魯詩とされている。また三体石經とも言われる三国魏の正始石經は、『尚書』『春秋』『春秋左氏伝』の三種類のテキストがいわゆる古文・小篆・隸書(今文)の三つの字体で書かれている。王国維は「戦国時秦用籀文六国用古文説」において、この「古文」を戦国期に秦以外の六国で使用された文字と考え、東方各国において籀文から変化した文字とした。この古文について劉起野は、「いわゆる隸古定(三体石經等の後漢末以降に作られたとされる古文で書かれたテキスト)は後漢末・晋代の邯鄲淳などの偽作で、隸古定『尚書』は東晋初年の偽古文出現から唐代天宝初年楷書による書き換えまで流通したテキストであり、この偽古文のテキストを遣隋使・遣唐使が日本の持ち帰った」と述べ、真の古文テキストと偽作された古文テキストがあるとした。一方、何琳儀の『戦国文字通論』は『説文』や三体石經に見える古文について、文字論として一部に誤りは含むものの戦国文字(王国維のいう「六国古文」)を伝える貴重な資料とする。劉起野は今古文の「字体の差違」に隠された「解釈の差違」を問題とし、何琳儀氏は今古文の「字体の差違」そのものを問題としている。本研究では、戦国期の古文で書かれた楚簡を近年の文字学の成果を踏まえつつ子細に読解することにより、その内容から「真古文(実は漢代偽古文)」「(六朝)偽古文」とも異なる、字体・語意ともに真の古文というべきものを確認し、戦国期から漢代にかけての『詩』の解釈の実際を解明することを目的とする。

3. 研究の方法

たとえば、『清華大学蔵戦国竹簡一』には、現行本『尚書』金縢篇と近い文献が含まれる。しかし、現行本『尚書』金縢篇と『史記』中の金縢篇からの引用と推定される部分の内容が異なることについては古くから指摘がある上、『清華簡』中の金縢篇はこの両者ともその内容が異なり、この三者に思想的な展開を想定できる。所謂「真古文」「偽古文」以外にさらに「楚簡古文」とでもいうべきものを措定する必要がある。加藤常賢は『尚書』について「真古文」=「今文」(所

謂「真古文逸編（一部の失われた真古文）」を除く）であると想定し、これが先秦からの伝承を反映しているとする。しかし『清華簡』金滕篇の出現により「真古文」は前漢の状態を反映するものであり先秦期の「楚簡古文」とは異なることが明らかとなりつつある（この点について「從《清華簡》金滕篇看周公事績與《豳風》毛序」（『保護与伝承視野下的魯分化学術検討会論文集』上海古籍出版社、平成30年12月）で明らかにした）。本研究では、如上の観点から『詩』について、先秦の「楚系文字」等（「六国古文」）で書かれた『詩』・漢代の隸書（今文）で書かれた『詩経』・現行の古文系『毛詩』の三つの層を想定して字体のみならずその解釈をも問題として研究をすすめる。

本研究は、『毛詩』のテキスト及び『毛傳』等の解釈が先秦から存在したということをも無前提に容認し、これらの『詩』理解に基づいて楚簡・漢簡を讀解する従来の方法を打破し、1) 戦国期の「楚簡」等に見える楚系文字の『詩』理解、2) 前漢代の『馬王堆帛書』『阜陽漢簡』や傳世文献等に見える「漢簡今文」期の『詩』理解、3) 古文系『毛詩』（『毛傳』『毛序』を含む）による『詩』理解（申請者はこの時代を前漢中期以降と推定しているが、この推定そのものの妥当性の検討も今回の研究において行う。）という三つの層を想定することにより、戦国期から漢代の『詩』の実態を当時の事実に基づいて究明する。

4. 研究成果

本研究の成果は、「5、主な発表論文等」に掲載したが、古文系『毛詩』の詩説や『毛傳』の解釈の一部が先秦の楚簡や金文と矛盾するものであることを明らかにしたことが挙げられる。

「從上博簡「孔子詩論」看『毛詩』齊風の詩意 以東方未明、猗嗟爲中心」では、『上海博物館藏戦国楚竹書一』『孔子詩論』第十七簡が引用する東方未明篇の解釈及び第二十一簡と第二十二簡が引用する猗嗟篇の解釈が、それぞれの『毛序』がいう「刺（そしる）」意味の解釈とは異なることを明らかにした。東方未明篇は自分に思いをよせる男性への女性の気持ちを巧みに歌う詩であり、また猗嗟篇の「**虞**（吾）**熹**（喜）之」は四本の矢が同じ場所に的中しこのことから国の混亂を禦ぐということが暗示されることを喜ぶ詩であることを「孔子詩論」の作者が認識しているのではないかと推定した。『毛序』がいう「猗嗟、刺魯莊公也。齊人傷魯莊公有威儀技藝、然而不能以禮防閑其母。失子之道、人以爲齊侯之子焉」などの「人を刺る」という解釈は「孔子詩論」には見えない。戦国期の同時代資料である古文で書かれた「孔子詩論」にその痕跡が確認されない以上、『毛序』が先秦から存在しかつ子夏の作であるとする従来の説については再検討が必要であることを明らかにした。

「『毛詩』に見える「萬舞」について 一邶風・簡兮篇を中心に」では、新出の「**邶**尊」と呼ばれる商末期の青銅器の銘文の最後に「大万」という語が見え、現行本『毛詩』に見える「萬(万)舞」の内容がかなり具体的に特定推定されることとして議論をよんでいる（「萬」と「万」は本来別字）。本稿ではこの「万」と呼ばれる一族の舞楽について検討することにより、『毛詩』邶風・簡兮篇の原義的解釈が商の故地である衛国に残る「萬舞」の様を詠い、かつ衛公の幸多きことを願う詩であることを明らかにし、『毛傳』の衛の碩人が周都にいるべきことを詠むとする解釈や『毛序』の碩人が衛において周建国の盛時を偲んでいるとする解釈とは異なることを述べた。

「從楚竹書《緝衣》篇看《毛詩》“緝熙”的訓詁」では、近年出土した『郭店楚墓竹簡』『上海博物館藏戦国楚竹書一』が引用する現行本『毛詩』の「緝熙」を取り上げその意味を検討した。現行本『毛詩』に見える「緝熙」は、『毛傳』が「緝熙、光明也」と注し、『鄭箋』が「穆穆乎文

王、有天子之容。於美乎、又能敬其光明之徳」と注して以降、朱子を除いて大体「光明」の意味で理解されてきた。しかし、李家浩氏により「茲^四」と隸定できる「紵衣篇」第十七簡の出現により、少なくとも先秦期においては「緝熙」は「継ぎ廣げる」という解釈が妥當であることを明らかにした。

紀元前四世紀中期ごろに成立したと考えられる『郭店楚墓竹簡』『上海博物館藏戦国楚竹書一』等に見える詩説及び「萬舞」「緝熙」などの語が、『毛序』『毛傳』等の古文系の『詩』解釈と異なる解釈を持っているのは、『毛序』『毛傳』の特殊性を物語るものである。これらは、漢代の政治状況のもとで体系的な再解釈が行われた後のものと考えざるをえない。A『詩』が成立し、その原義的解釈が理解（あるいは無意識に了解）されていた時代から、B儒家系の諸子が『詩』を引用して立論を権威づけていた時代、C儒家が、諸子との抗争の中で優位な立場を築き『詩』が儒家以外の諸子にも引用されだした時代をへて、D経学という国家学として権力から認定された時代にわたって、『詩』はそれぞれその取り扱われ方が違っており『毛詩』系の詩説の一部が漢代以降の新しいものであることを明らかにした。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 9件 / うち国際共著 7件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 藪 敏裕	4. 巻 1
2. 論文標題 『毛詩』に見える「萬舞」についてー（北におおざと）風・簡兮篇を中心にー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 石川忠久先生記念論集(汲古書院・2021年12月)	6. 最初と最後の頁 55-72
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藪 敏裕	4. 巻 7
2. 論文標題 從甲骨金文資料看《毛詩》中的萬舞ー以《（北におおざと）風・簡兮》篇爲中心	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 青銅器与金文	6. 最初と最後の頁 18-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 劉海宇	4. 巻 第4集
2. 論文標題 說西周金文中的「」和「土」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 青銅器與金文	6. 最初と最後の頁 66 - 75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 劉海宇	4. 巻 -
2. 論文標題 據清華簡『四告』談『師同鼎』銘文首句的釋讀	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 復旦大学出土文献与古文字研究中心HP	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藪 敏裕	4. 巻 第8回
2. 論文標題 二宮尊徳の『詩経』伐柯篇解釈	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国際二宮尊徳思想学会第8回学術大会《報告書》	6. 最初と最後の頁 48-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 藪 敏裕	4. 巻 第一集
2. 論文標題 従楚竹書《緇衣》篇看《毛詩》“緝熙”的訓詁	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 出土文献	6. 最初と最後の頁 137-145
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 劉 海宇	4. 巻 第3集
2. 論文標題 西周金文「執駒」及『詩経』相关内容考述	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 青銅器與金文	6. 最初と最後の頁 221-229
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 藪 敏裕	4. 巻 -
2. 論文標題 従《清華簡》金滕篇看周公事績與《ひん風》毛序	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 保護與傳承視野下的魯文化學術検討会論文集	6. 最初と最後の頁 300 - 315
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 數 敏裕	4. 巻 -
2. 論文標題 従上博簡「孔子詩論」看『毛詩』齊風の詩意 以東方未明、猗嗟爲中心	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 蹴鞠と齊文化 第22届国際歴史科学大会し博衛星会議文集	6. 最初と最後の頁 199 - 207
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 劉海宇	4. 巻 -
2. 論文標題 西周金文「執駒」及『詩経』相关内容考述	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『青銅器・金文与齐鲁文化学术研讨会予稿集』	6. 最初と最後の頁 310-320
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 劉海宇	4. 巻 第22號
2. 論文標題 『夢庵藏印』所收古璽の整理與研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『中国出土資料研究』	6. 最初と最後の頁 45-78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計7件 (うち招待講演 4件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 數敏裕
2. 発表標題 《詩経》魯頌ひ (門構えに必) 宮篇に見える万舞
3. 学会等名 東北アジア青銅文化比較研究国際学術シンポジウム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 劉 海宇
2. 発表標題 西周金文中の所謂“訊”字
3. 学会等名 東北アジア青銅文化比較研究国際学術シンポジウム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 劉 海宇
2. 発表標題 『楓園集古印譜』所収古璽の調査與研究
3. 学会等名 中国古印研究国際シンポジウム2019 IN 岩手
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藪 敏裕
2. 発表標題 二宮尊徳の『詩経』伐柯篇解釈
3. 学会等名 国際二宮尊徳学会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 藪 敏裕
2. 発表標題 『上博楚竹書』から見た『毛詩』に見える「緝熙」の解釈
3. 学会等名 上海復旦大学出土文献与古文字研究中心ワークショップ（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 劉 海宇
2. 発表標題 西周金文『王在周』所涉及建築考述
3. 学会等名 中国第二回考古学大会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 劉 海宇
2. 発表標題 太田夢庵旧蔵古璽印の整理與研究
3. 学会等名 上海復旦大学出土文献与古文字研究中心ワークショップ（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 藪敏裕	4. 発行年 2020年
2. 出版社 汲古書院	5. 総ページ数 430
3. 書名 『毛詩』の文献学的研究 - 出土文献との比較を中心に -	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	劉 海宇 (RYU HAIYU) (70649441)	岩手大学・平泉文化研究センター・客員教授 (11201)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 東北亜青銅文化比較研究国際学術研究会	開催年 2019年～2019年
------------------------------	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------